

---

# Deleter事件

ハヤともくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Deleter事件

### 【NZコード】

N8455M

### 【作者名】

ハヤともくん

### 【あらすじ】

月光高校でおきた方法不明の殺害事件は、とある悪魔になぞらえて

Deleter事件と呼ばれた。

親友までも被害者にされたシンジは犯人を捕まえることができるのか！？

意地、プライド、約束。

それぞれの想いが絡み合つ超本格サスペンス！

## 第一話 始動（前書き）

はじめは説明ばっかですね。

あと若干デスクノートに近いのは許してください(汗

飽きずに最後まで見ていただけると幸いです。

## 第一話 始動

まずは魔の話をしよう。

そいつの名は デリーター D e l i e t e r 。

そいつは見つめるだけで人間を殺すことができる。

もし実在するなら世界は、人間は、おかしくなつていいだろ？

でも、そんなのいるわけない。誰もがそう思っていた。

あの日までは。

江藤 リョウスケ。通称エトー。

エトーは月光高校に通う一歳。明日になつたら二年生だ。

月光高校は生徒数が全国一で、学校もかなり広い。

シンジとエトーはボクシング部に所属している。

シンジとエトーは中学の時に出会い、4年連続でクラスが同じだ。

「正直、仲良すぎちがわるい」

シンジのよく言われることベスト5には入るだろ？

ん？シンジって誰かって？

高山 シンジ。漢字で真士。

「お前フルネーム左右対称じゃん！」

これもベスト5に入るだろ？。シンジはいつもが気持ち悪いと思つてゐる。

今日の部活は一年生最後の部活で、シンジはなぜか毎日の流れを感じた。

そのせいか、帰り道、シンジとHトーは将来の夢の話をした。

シンジにはまつきっとした夢はない。

ボクシングは護身術としてやつてゐるだけだったし。でもHトーは

「幼稚園の先生になりたいんだよね」

と言つ。なぜ幼稚園の先生なのはわからぬ。

でも、シンジはひたすら羨ましかつた。

それは、Hトーの目が輝いていたからだ。

(やつたい夢があるつていいなあ)

次の日。

この学校は入学式と始業式を同時に行つ。

シンジにとってはそれがめんどくせしちょつがない。

シンジはそのめんどくせこ間も夢のことを考へていた。

(将来どいか今やりたいこともねーし)

めんどくせこのが終わると、皆一斉に教室にもどる。

その瞬間、シンジの3メートルぐらい前にいたHトーが倒れた。

「Hトーへじつったっ!」

シンジや周りにいた奴は心配になつさう呼びかける。

Hトーは動かない。

シンジは、いや、生徒全員は状況がすぐには理解できなかつた。

しかしシンジは30秒後ぐらいたよつやく理解できた。

人口呼吸をする教師。

脈をはかり、ドウコウを見る保健教師。

そして聞こえたこのセリフ。

「救急車はいい。警察をよべ！」

やつ、エトーハーは……死んだ。

シンジに悲しみと、疑問と怒りがこみあげた。

「エトーハトーハトー……

なんでだよ！なんでお前が死ぬんだよ！……」

周りの教師に止められながらシンジがさけんでる間に警察がきた。

検視官が少し調べたあと、警察のリーダーっぽい奴がいつ言った。

「どこもけがしていなー？ふざけるなー

人間がそんなに簡単に死ぬわけない！……」

部下っぽいのは

「でもあるのはこの丸い跡だけで……」

と返す。

その会話を聞いた生徒がどこのかでつぶやいた。

「Deleterだ…Deleterは本当にいるんだ！」

IJの瞬間にシンジの「やつたい」と「が決まった。

いや、「やうなこといけなここと」と叫うべきか。

とにかく、シンジは暫つた。

Deleterを捕まえてみせる、と。

4月1日、IJのDeleter事件は始まったのである。

## 第一話 始動（後書き）

最後まで読んでくれた、本当にありがとうございます。

初投稿なのでかなり緊張しています（汗

感想おねがいします。

## 第一話 協力（前書き）

第一話です。

少し長くなりましたが、

どうか最後までおねがいします。

## 第一話 協力

「デリーター D e l e t e r だ・・・ D e l e t e r は本当にいるんだ！」

「うして始まつたD e l e t e r 事件。

シンジは一晩中エトーを殺す可能性のある人間を探していた。

「エトー・・・エトー・・・・・・」

そつ何度も繰り返しながら。

そしてふと思い出した。

「一番エトーと関係が深いのは桜川だな・・・」

桜川 ミナミ。

エトーの彼女で、それも付き合い始めたのは中学二年の時だ。

「あとはブタか」

赤沼 トンスケ。通称ブタ。

高一の時にエトーが殴りとばしたのだ。

二人とも一年で同じクラスだったため、

シンジはとりあえず桜崎とブタを見張ることにした。

次の日。

シンジが教室＝2－Eに入った瞬間に、

「おい、シンジ！聞いたかよ！」

といふ声がした。

「お、ケント、ダイ、コウイチ。」

岡村 ケント。若井 ダイ。来条 コウイチ。

三人は小学校の時の友達だ。

ここからトニーは顔はしつっている、といふ程度の関係だ。

「なんの話だ？」

「昨日、一年が一人やめようとしたらしいんだけど、」とケント。

「二人とも死体で見つかったんだよ！それも、傷がなく、丸いあと  
がついてたんだって！」とダイ。

「なに！？本当か！」

丸いあと。つまり犯人はDelete以外に考えられなかつた。

シンジは驚き、同時にDeleteーに対する怒りが高まつた。

「なんなんだよーなんでそんなに簡単に人を殺せるんだよーー！」

Deleteーから逃げるすべはない。そういうメッセージなのだらう。

シンジは我に返つた。シンジの大声で、クラス中がしらけでいた。

そこで、異常に震えている奴がいた。

ブタだ。

多分パワフルモードの電動ハブラシより震えていたらしい。

シンジは、桜川はと思い、見てみると、机に頭を伏せていた。泣いているのだろう。

隣で友達の北宮 ナオが慰めていた。

シンジにはどうかうもなにか隠してこるよりは見えなかつた。

この日は登校者数も少なかつた為、学校はすぐ終わつた。

すると校門に見覚えのある奴がいた。

そこにはシンジに向つていた。

「ん？お前はたしか、事件の時に先生達におさえられていた・・・」

「ソレでシンジは思ひだした。」

「おまえ、警察のリーダーーー！」

警察のリーダーは半分キレながらいいつて叫んだ。

「お前とはなんだ。オレは22だぞ。それに神垣　トモヒロって名前もあるー。」

「わりいわりい。トモさん、でいいか？」

トモさんは大人げないと思つたのか、簡単に許してくれた。

「まあいいや。お前の名前は？」

「俺は高山　シンジ。よろしくな、トモさん。」

シンジはトモさんとしゃべつていると、変な感じがした。

「トモさん。なんで学校にいるんだ？」

「聞き込みだよ。お前・・・じゃない、シンジもDeleteーを捕まえたいたるつねー、

オレも捕まえた。なんとしても捕まえたんだ！家でお寝んねなんかしてる場合じやない。」

シンジはようやくわかった。さつきから感じていた違和感の意味が。

(似てるんだ……俺とトモさんって。)

「なあトモさん。なんでそんなにD e l e t e r をつかまえたいんだ？」

「……オレの父さんは、偉大な刑事だつた。たつた一人で一体何人の命を救つたことか。

父さんは誰かを救つたびにオレにこう言つたよ。

『父さんの命が命を救つたんだ。命つて存在は重い。お前も命の重みを知れ』って。

だから……ゆるせないんだ。命を簡単に消すあのカスヤローが

！

ちがつた。シンジは気づいた。似てるんじゃなく、同じだとこいつ」と。

「ん？ ビーした？ シンジ。」

シンジはある決意をした。

「トモさん……一緒にD e l e t e r をつかまえよっ。」

「あ・・ああー..めりじくな、シンジー。」

トモさんと協力する决心。

そして自分達が回りだといつも同じでいたトモさんも、それは回りだった。

## 第一話 協力（後書き）

最後まで読んでいただき、本当にありがとうございます。

まだまだがんばります。

## 第三話 裏世界（前書き）

よつやくじつかりしてきました。

今回も長いですが、最後までおねがいします。

## 第三話 裏世界

神垣 トモヒロ＝通称トモさんと協力することになったシンジ。

「デリーラー Deleteを捕まえるつて言つても具体的にどうする？」とトモさん。

シンジはこそこそ話す必要のない場所、つまり秘密基地のような場所が欲しかった。

そのことをトモさんに話すと、

「それなりい場所がある。」と言われた。

20分後。

そこはいたつて普通の家アパートだった。1LDKの部屋を一つ借りているらしい。

「君はオレと部下一人で使つている。放課後はここにきてくれ。」

「え？ 部下一人つて……」

シンジは今あまり「人」が信用できなかつたのだ。

トモさんはそれを察したのか、

「大丈夫。なんせオレの部下だからな。」

とこつてくれた。

ドアを開けると、そこには一人の男がいた。

シンジはこつを見て、つい声がでてしまった。

「あつー警察の部下ー！」

そう、そこつはあの時の「部下っぽい奴」だった。

「えーーートモさん、こいつ誰ですか？」と、警察部下。

「こつはシンジ。死んだトニーの親友だ。ほり、覚えてるだろ？

あの時教師達におれられてた・・・」と、トモさん。

「ああーーーで、なにでこつー」と眞然の質問をする警察部下。

「簡単だ。協力するからだよ。」と、トモさん。

「ええーーーんすかー？」と慌てる警察部下。

めんどくせくなつたのか、トモさんは「いーんだよ」と軽くあしりつた。

警察部下はまだ「いや、でも・・・・・」とあたふたしてくる。

シンジは自分の完全な上下関係がおもしろくなつてきた。

「紹介するよ。」そこは田代 ツトム。検視官で、オレの部下でもある。」

ようやく落ち着いたツトムは「ようじゅね」と言いながら頭を下げた。

それがあわせてシンジも頭を下げた。

ツトムが思い出したようにパソコンを開いた。

「これ、見てくださいよ。」

シンジとトモさんが画面をのぞくと、「んな文字がでていた。

『裏Deleter』

「なんだこれ?」とトモさんが聞く。

「月光高校の裏サイトみたいですね。昨日開かれたみたいですね。」

裏Deleter。それはDeleterについて自由に書き込めるサイトだった。

ツトムが実際に書きこまれているページを開いた。

そこには、適当に作られたペンネームでいろんなことがかかっていた。

マジこわいよね——逃げようとした人、みんな殺されたんだろ

?

などの書き込みが多数続いていた。すると画面中央に「WORDH  
NG」という文字がでた。

「ほり、いわやつじん更新・・・」

とツームが説明しようとした瞬間に、全員の皿が書き込まれた文に  
集まつた。

3丁の空き地に人が死んでるんだって！

「なにー?」「どだよー。」

「落ち着いてください、トモさん！ガセの可能性も・・・」

フルルルルル！

ツームの声を搔き潰すようにシンジの携帯が鳴った。

「もしもし？ああ、ケントか。どうした？」

「お地で北富が死んでんだよー。」

北富 ナオ。それはシンジのクラスメートで、桜川の友達の名前だ  
つた。

「そんな・・・今いくよー。」

シンジは電話を切り、トモさんとツームに説明した。

「そんな・・・」ヒットム。ぼーぜんとしている。

「とにかくいいづつー

トモさんが言つてすぐ、ツトムが車を準備した。

空き地につくと、人だかりができていた。するとトモさんが  
「シンジ、お前はあまり田立たないほうがいい。野次馬にまじつと  
け！」

ヒシンジに伝えた。シンジは了解し、野次馬に混じる。

ツトムが死体の検視をしたあと、トモさんにこづけられた。

「死体に傷はありません。あるのは・・・丸い跡だけです。」

トモさんに怒りがこみあげた。

(くわい・・！D e l e t e r ・・！-！)

シンジは、周りを見渡し、誰がいるのか確認していた。

すると野次馬の先頭で大泣きして、周りの人におさえられている女  
の人がいた。

北富のお母さんなのだろう。それはヒトニーが死んだ時の自分の様に見えて、

シンジは胸がいたくなつた。

そしてシンジはDelete事件のあたえる悲しみを再び実感した。

## 第三話 裏世界（後書き）

毎度のことながら、読んでいただきありがとうございました。

次回に期待してください。

あと感想もおねがいします。

## 第四話 天才（前書き）

第四話です。

トモさんの出番がかなり少なくなつてしましました（笑）

## 第四話 天才

北富ナオ殺害事件。

それは デリーター D e l e t e r 事件の一部とされ、操作打ち切りとなつた。

シンジたちはアパートにもどり、推理をしていたのだが、

「やつぱり、犯人の手がかりが少なすぎるな。」

そう言つたのはトモさんだつた。

その通りである。ダイイングメッセージー<sup>ジ</sup>はなく、犯人からのヒントもない。

「そ<sup>うい</sup>え<sup>ば</sup>ツトム。E組のあやしい奴調べとけつて言つただろ。どうだつた？」

「ああ。僕とトモさんの聞き込みで手に入れた情報をまとめたら、けつこ<sup>うこ</sup>ましたよ。」

「それつてブ・・赤沼とか、桜川のことつすか？」

シンジはツームに自分があやしいと思つていた奴のことを話す。

「いや、赤沼はともかく、桜川はないだろ。江藤のことが好きだつたのは確かだし。

ほくがあやしこと思つてゐるのは高橋 ハウキだ。

高橋 ハウキ。シンジとは高一の時にクラスが同じだ。高橋が疑わ  
れる理由は簡単だった。

「高橋が桜川のこと好きだからですかね？」

「うん。でも高橋の評判は上々。揉め事とかがなかつたかしらべて  
るところだ。」

もう一人あやしい奴がいる。原谷 トシだ。」

シンジは原谷のことは知らず、首をかしげた。

それを見て、ツトムが説明をはじめた。

「原谷 トシ。いわゆる変態で、桜川が被害を受けたとき、江藤と  
揉め事をおこしているんだ。」

「・・・めひゅくひゅく座してございませんか。」

トモさんも同意見だった。

「まあ明日はその二人のことも見ていくれ。」

気がつけばもう20時をまわつてゐる。シンジは家にもどる所とし  
した。

20時30分。シンジは家への道の途中にある川をわたろうとして

いた。

そこで、シンジは橋の上に人がいることに気がつく。

「あれ・・・?」

「どうせ、同じ年代の女の子のやつだ。」

「え・・・?まさか・・・?」

今その女の子が橋の欄干にのぼったのだ。

「やめろーなこやつてるんだー!」

シンジは思わず叫んだ。すると女の子はシンジに向がついたが、そのまま靴を脱ぎはじめた。

シンジはいつの間にか走りはじめていた。そして自分も欄干にのぼる。

「死んでなにならんだよー馬鹿なことやめろー!」

「シ・・シンジくん・・・?」

「え?」

その女の子は中井 ミカ。シンジのクラスメートだった。

「中井・・・なんで・・・?」

「シンジくん……止めないで。私はこの世にいていい人間じゃないの。」

中井は前かがみになり……落ちなかつた。

シンジが抱きしめていたのだ。

「命をそんな簡単にすてるなよ！」

中井の頬に涙が流れた。

シンジは我に帰り中井を欄干からおろした。

「さあ、事情を説明してくれ。なんで自殺なんてしようとしたんだ？」

中井は少しの間いつむいていたが、すぐに顔をあげて話しあじめた。

「Delete事件で使われる凶器は……私と私の父が作ったの。」

それは、意外すぎる返答だつた。一呼吸おいて中井は続ける。

「私は怪物と呼ばれてきたわ。HQ200越えの頭脳を持つて生まれたせいで。

そして私の父はそれを利用した酷い科学者だつたの。……

そのまま中井過去の話を続けた。

「僕は神に選ばれたんだ！こんなに素晴らしい子供が生まれるなんて！」

中は薄暗く、妙な機械がゴウンゴウンと音をならしている研究室に眼鏡をかけた男が一人と、幼稚園生ぐらいの小さな女の子が一人。

女の子は男に聞いかけた。

「ねえパパ。これなーに？」

男は鼻息を荒くしてこたえた。

「これはねミカ。人間を一発で殺してしまつ、素晴らしい武器、いや、兵器なんだ！」

僕はこれをやさしい人たちに売つて、億万長者になるんだよ……」

「ふうん……」

「わかつたらミカ、キミの素晴らしい頭での仕組みを完成させてくれ！」

「……じつして私はなにがなんだかわからないまま設計図を作ってしまったの。」

「中井の父は今どうしてるんだ？」

「事故で死んだわ。その兵器を完成させた一ヶ月後ぐらうね。」

シンジはようやく事情を理解した。

「それで設計図を作つてしまつた自分が悪いとおもつたのか。」

「だつて・・私が生まれてこなければこんな事件は起きなかつたのに・・」

「じゃあ決まりだ。お前は生きるしかない。」

シンジが当然のようひと言つた一言の意味が中井にはわからなかつた。

「・・・え？」

「作つてしまつた以上、責任をとる必要があるし、なによつ、

その兵器を一番知つてるのはお前だ。お前なら・・犯人、D e l  
e t e 「を捕まえられる！」

シンジの答えは、中井の心に深く、しつかりと入りこんでいた。

「中井。俺は警察とチームを組んで捜査してる。お前も協力してくれ！」

「俺には・・お前が必要だ。」

その瞬間、中井にはシンジが神の様に見えた。そして、決断した。

「・・・うん。私、協力するよ。」

シンジに協力することを。

## 第四話 天才（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

状況を表す文を多くしてみました。

感想よろしくおねがいします。

## 第五話 狐高（前編）

第五話です。キャラが多くなってきたんで、  
ひつからり覚えとこいやつてください（笑）

今回は一話と二話のまとめです。

どうか最後までよろしくおねがいします。

## 第五話 孤高

Deleter デリーター事件。

その殺人方法を見つけるキーマン、とこりヨリキーウーマン、中井ミカ。

中井のことを見たときにメールで云々、シンジは一日を終えた。

次の日。E組に入ったシンジにケント、ダイ、コウイチが近づいてきた。

「おい、シンジ。お前Deleter事件のこと、なんか調べたりしてんのか？」

と、ケントが問う。

その理由はシンジがシトム=つまり警察の車で北富が殺された空き地にきたのを見たからだった。

「ああ。Hトーのためにもおれは捕まえてみせんよ。」

「じゃあ、高橋のことも調べといた方がいいよ。」

と、ダイがいったが、コウイチが反論する。

「高橋はねーってー俺と同じ『コウ』が名前に入ってるからなー。」

・・・はでしなぐビーでもいい理由だ。

しかしシンジは高橋を疑う理由を聞いてみると・・・その答えは意外なモノだった。

「今、高橋が桜川にモーレツアタックしてるみたいなんだよー。」

「なにー? それで、桜川は?」

「まだつきあつたりはしないだろ? カビ・・・嫌がってはないらしい。」  
と、ケント。

シンジは、自分の知らない情報を集められる」とこづづき、ケントにも話題をふった。

「ケント、お前も高橋が一番怪しこと思つか?」

「いや、俺は断然レトロードだな。」

村重 レトロード。日本人とアメリカ人のハーフ。もちろんクラスメートだ。

「俺、席近いからわかるんだけどさ。あいついつもなんか呟いてるんだ。」

「マジでコレーよ。頭いつてるとしか・・・」

「キーンゴーンカーンゴーン。」

ケントの声をかきけすようにチャイムが鳴り響いた。

「おい、早く席つけー。」

担任で理科教師の長谷部 トオルが声をかけた。

「チツ・・・」えーなあ。」とケントが一言言つて、全員席に戻つた。

理科の時間の途中、シンジはクラスのメンバーの様子を伺つていた。  
あるときシンジの左の左の前の前にいる市間 タクミが机のかげで  
80ページぐらいのノートを読んでいた」と書いた。

すると、そのノートの表紙にまくつ書いていた。

『Delete 事件についてのまとめ』

シンジは驚いて声がでそうになつた。そつ、タクミも事件を調べて  
いたのだ。

授業終了のチャイムがなつてすぐにシンジはタクミのところにいく。

「おい、タクミーお前も情報を集めてるのか?なら情報を・・・」

交換しようつ。そつ言いたかったのだが、タクミが口を挟んだ。

「僕は誰とも組まないし、誰の協力もいらない。」

タクミは静かに、かつ燃え上がるようなまなざしをしていた。

そう、それはたとえるなら孤高の戦士。

「あいつ、怖いね。D e l e t e r に狙われなければいいけど・・・」

「

隣で中井が囁いた。シンジはその言葉をきいたとき、なぜか大きな不安がよぎった。

そう、それはその言葉が本当になつてしまつのような、嫌な予感だった。

## 第五話 孤高（後書き）

タクミ「勝手に死亡フラグたてないでくれない？」

いや、名前覚えてもらいたいからって」にまで参加するか！

中井「でもいい作戦じゃない？毎回同じような」と書くよつ絶対面白いわ。」

シンジ「せついや前回紹介したのに変態野郎でなかつたな。」

トモさん「そんな」とよつオレー2話連続出番ほぼなしだよー。」

まあ、次回がんばるから。

全員「感想おねがいしまーす。」

## 第六話 目的（前書き）

高橋「やつましたよー。」

シンジ「え？ なにが？」

(まざい・・!)のままだとネタバレに!)

あつ！あつちに原谷 トシが！

シンジ「え？ 原谷って誰？」

いや、あなたのクラスの変態だよ！

シンジー ああ・・・忘れてた。

おい！！！読者の嘘をなんも名前は覚えながら読んでくださいね！

## 第六話 目的

放課後。シンジと中井はアパートにいった。

「お？ そこいつが中井 ミカか。よろしくな。」

「僕はツーム。よろしくね。」

トモちゃんとツームが頭をさげた。それにつられて中井も頭をさげる。

「それで中井。その兵器つてのはどういってシステムなんだ？」

中井は記憶をさぐりながら話す。

「たしか・・・電気と超音波を発するものだったと思つわ。」

なんでおぼえてんだよーーー

・・・といいたいところだが、シンジはなんとかこらえた。

「といひでツームさん。裏Deleteデリーテーの方は？」

「ああ。普通だよ。まあ、見つかるわけないけど、

連續殺人犯の話に入るのはかなり度胸がいるからね。ほら。」

もう怖すぎだよ。早くつかまんないかな。

それにしても桜川かわいそうだな。江藤と付き合つてたんだろう？

Deleter…嫌な響きだよ。

つてかなんでDeleter事件つて呼ばれてんの？

さあ、オレも友達から聞いたし。

ジトムは画面をどんどんスクロールしていく。

「あれ・・・？」

「どうかしたのか？シンジ」

シンジのつぶやきが毛いじれたようで、トモさんが反応した。

「いや・・・なんでもない。」

シンジは画面を見て、一瞬違和感がしたのだが・・気のせいだと思  
い、深く考えないことにした。

「とりあえず一人とも。学校で情報をあつめてくれ。」

トモさんの一言で、シンジと中井は家に帰った。

次の日。

またしても、シンジのもとに三人が集まってきた。

「よひ、ケント、ダイ、コウイチ。」

「おい、ついに高橋の思いが実つたぞ！」とケント。

シンジはおどろいて声がでてしまつた。そして、なんとなく周りを見渡すと、

確かに桜川の顔色がかなりよくなつていたのだが、

それ以上に氣になつたのはシンジ達の会話に敏感に反応した一人。

レトローデと・・・ブタ。

すると同じく異変に気づいた中井がシンジのそばで囁く。

「ハナハナ、モテモテね。」

するとヒツジが驚く。ヒツジやラブタちゃんは鼻より耳がいこようだ。

シンジと中井はそれ以上なにも情報が入らぬまま、放課後をむかえた。

数分後、アパートで会議がはじまつた。  
まず中井が話しあじめた。

「犯人がだれか、じゃなくて、田的を見つけて先回りするっていうのはどう？」

トモさんも同意し、意見を述べる。

「まあ、普通に考えれば一番最初のターゲット、エトーレは目的の一つだろ？」

しかし犯人＝Deleterがなぜエトーレを殺さなければいけないのか？

それがわからなくてとまつて『いるんだ』

その時、シンジの頭に昨日の違和感がはっきりとした状態でよみがえった。

それにしても桜川かわいそうだな。

頭のなかで紐の結び目が解ける感覚がした。

「Deleterの狙いは・・桜川・・？」

全員がはつとわかる。そしてトモさんがもう一つの結び目を解いた。

「セツノ、北富は、桜川の親友！」

「まちがいなきわね。Deleterは//ナ//を苦しめるために・・」

と自分で言いながら、中井は思い出した。

「高橋・・・・・・」

シンジもその一言で思い出す。

「高橋が・・・高橋が危ない！」

そのころ、商店街。

そこにいたのは高橋と桜川だ。

そして二人に忍び寄る影が・・・二つ。

## 第六話 田村（後輩）

トモさん「出番あつてよかつたー！」

全員「おめでとー。」

ツトム「出番あつてよかつたー！」

全員「いや、別になくてもよかつたんじゃないですか？」

ツトム「ええー…? なに、その差…？」

全員「こんなつるさい人はほつといひ、感想お願ひします。」

ツトム「ええー…?」

## 第七話 高橋（高橋）

シンジ「高橋・・・あひたりー。」

あの・・前が他のところがなくとも・・

トモアと「早く情報を・・」

あ・・・もう二二二。早く読んどもう二二二。

## 第七話 高橋

「ケントー・桜川と高橋がどうしているかわかるか？」

「ねえ、ミナミと高橋の居場所知らない？」

D<sub>e</sub>l<sub>e</sub>t<sub>e</sub>r<sup>デリーター</sup>の田代が桜川を苦しめる」とだと氣づいたシンジ達。

シンジと中井はかなり焦りながら桜川と高橋を探していた。

「ダイ！」（以下省略）

「「ウイチ！」（以下省略）

シンジも中井ももう電話をする相手がいなくなつたある。

しかしその時、ツームのパソコンからピーでもブーでもない変な音がした。

トモさんが一人を探すよう命じた部下からの図面だ。

「商店街から林の方に行こうとしてます。」

ツームの一言で、全員の顔の色がかわる。

「よし！ オレ、シンジ、中井はすぐに林に向かう。ツームは元気で残つてやる。」

シンジ、トモさん、中井が動きだした。』

桜川、高橋は林へと入つていった。

そして、ついに一つの影が動き出す。

それは、仮面をかぶつていた。「恐怖」を形にしたよつた悪魔の仮面だ。

手には、妙なものを持つてゐる。

それは持つ部分があり、先端には細長い円柱状の物体がついている。そしてなにより特徴的なのはその円柱状の物体の周りについた四つの小さなトゲ。

それにはどうやら電気がたまつてゐるよつだ。

桜川と高橋はようやくその者の存在に気づいた。

「な・・・まさか、Delete や?」

「そ・・・そんな・・・」

二人はうろたえるが、その者は言葉も発しないまま一人に近寄る。  
「怖い・・怖いよ・・・高ちゃん・・・」

「とにかくにげましょ!」

一人は走って林の奥に逃げ込む。

その者は静かに一人を追いかけていった。

シンジ、トモさん、中井は林の前に到着した。

「よし、オレが中にいくから、シンジと中井は林の外にいるんだ。」

「トモさんー俺も行くに決まってるだろ?」

トモさんは少しキツイ表情で反論した。

「お前達はまだ子供だ! シンジだけならともかく、中井はどうするんだ! ?

「一人の方が安全だろ! !」

シンジは食い下がるが、中井を危険にするわけにはいかないと想い、

途中で反論を始めた。

しかし、今度は中井が食い下がる。

「この近くにいる警察を集めて。それならシンジが行つてもいいでしょ? 」

「…わあったよ。」

トモさんはしづしづ部下を呼んだ。全部で四人だ。

「よし、シンジ。さつあと行くぞー。」

息がきれる。特に桜川はもう限界だ。

「うううー。」

「高橋やんー？あつー。」

先に進んで枝をおしのけていた高橋が、足を切ってしまったのだ。

「大丈夫？」

それもかなり深く、血がどんどん流れている。

「ミナミさん、僕はいいですから、早く逃げてくださいー！」

「もう簡単にみつかないよーちょっと休んで・・。」

ガサガサ。

「あ・・ああ・・。」

桜川がふるえる。

一人の進んできた道から、仮面の男が現れたのだ。

しかし、高橋には、もう恐怖はなかつた。

「早く・・早く逃げてください！」

守りたい。

高橋の心にあつたのはそれだけだった。

「でも・・」

桜川は動搖するが、高橋はそれ以上何も言わなかつた。

桜川も、恐怖のあまり、すぐに逃げ出した。

そのころ、アパート。

「な・・・！？」

ツトムは裏D e l e t e r の新たな書き込みを見て、すぐに携帯を取り出した。

「トモさん！」

「！…そんな書き込みが！？」

「どうしたんだ？トモさん？」

「裏D e l e t e r に（今から林で高橋が死ぬ）って書き込みがあつたらしい。

ツトムのチェックがおくれて、10分前の書き込みだ。」

「そんな・・・早くいこう!」

シンジとトモさんが林の奥に進んでいくと、人の声がきこえた。

「人の声・・・？行つてみよう、トモさん！」

声をたよりに進んでいくと、そこには人だかりができていた。

トモさんが道を開けていく。

「警察だ！…だけ！！」

シンジも後ろからついていく。

中央にあつたのは・・高橋の死体と、悪魔の仮面。そして、涙を流す桜川だ。

「高ちやん・・ごめんね・・ごめんね・・！…！」

シンジとトモさんは、自分の無力さに怒り、唇をかみ締めていた。

そのころ、林の外。

中井は、林からでていく人物を見つけた。

「刑事さん、捕まえてください！」

トモさんの部下たちがその男を捕まえた。

「あらがとうござります。・・・えつ！」

その男とは、赤沼・・ブタだった。

## 第七話 高橋（後書き）

ツトム・・・一人で残るとかむなしいね。

ツトム「いえ、僕の仕事ですから。」

さすがただつとむ。

ツトム「名前はきにしないでくださいー。」

ほら、つとむしかないひと。あのセリフいわないと。

ツトム「もつ・・・感想お願いしまーす！」

## 第八話 情報（前書き）

もつ第八話です。

今日は過去最高の長さなので、じっくり読んでください！

ツーム「お願いしまーす。」

お、わすがただつとむ。でも今回全く出番ないよ。

ツーム「や、そんなん！」

## 第八話 情報

林の中で殺された高橋 コウキ。

トモさんはシンジを野次馬にまじらせ、全員の顔を見渡す。

野次馬の前側に、シンジやツトム、中井との会議で名前があがつた者がいた。

それは、村重 レトロードと市間 タクミだ。

シンジは野次馬の外側にまわった。

するとシンジに何者かが声をかけた。

「おい、シンジ。大変なことになつちまつたな。」

岡村 ケント、若井 ダイ、来条 コウイチの三人だった。

「なんでお前らここにいるんだ？」

シンジが聞くと、三人は首をかしげてお互いを見合つた。

するとケントが代表してシンジに話した。

「どうしてって…『裏 Delete』を見たからだよ。お前は違うのか？」

そうか、シンジは納得した。

今から林で高橋が死ぬ。

あの書き込みはDeleteが野次馬を作るための物だったのだ。  
考え込んでいたシンジにコウイチが話しだした。

「それより、見ろよ。」

シンジは「コウイチが指さす方向をむいた。するとそこには見知った  
顔がいたのだ。

「あつたのは原谷、むじつのは長谷部のヤローもいるよ。」

原谷 トシ。・・変態だ。

長谷部 トオル。シンジ達の担任だ。

トモさんは桜川に話しかける。

「高橋とお前はいつはぐれたんだ？」

すると桜川は先ほどの状況を説明した。仮面の者のこと、高橋が自分を守ってくれたこと。

「じゃあ一番最初に高橋を見つけたのはお前か？」

「・・・私は三番目。きた時にはその一人がいました。」

桜川はレトコードとタクミを指した。

トモさんは今度は一人に問い合わせる。

「一番最初に見つけたのはどっちだ?」

あるとレトコードが口をひらいた。

「ほ・・ほべですか。」

「お前・・」

レトコードが詰めつとしたとき、「タクミがわって入った。

「こいつを縫つての? われはなこよ。」

「なんでだ?」

「僕はD e t e rを調べてるんだけど、こいつも調べてるんだ。」

まあ、お互い協力してるわけじゃないけど。前資料を眺めると  
いろを見たんだ。」

トモさんはその話が本当か確認するため、質問を続けた。

「レトコード、お前はなんでD e t e r事件を調べてるんだ?..

レトコードは少しうつむいたあとで話はじめた。

「Hトーラさん、 とってもイイ人デシタ。 ほくのわからないコト、 教えてくれた！」

だから、 犯人ゆるせまセン…」

レトリーードは声が裏返っていた。

「タクミ、 お前は？」

「答[え]る必要はないよ。」

タクミはやう言つたあと、 野次馬の中に消えてこつてしまつた。

プルルルル。

シンジの携帯がなつた。 中井からだ。

「二人共林の外に来て！」

「トモヤマ…」

「じつした？ シンジ。 …なるほど、 わかった…」

トモさんは部下たちに後のことをまかせ、 シンジと一緒に林の外へ  
むかつた。

トモさんは林の外にむかつ途中、 シンジにレトリーードのことを話し

た。

シンジも、レトコードのことをケントにきいていたのだ。

「あいつのこと俺が知らなくても無理ないんだ。

なんかあいつ、一学年が始まる日、朝きてすぐに保健室いってたらしくいた。

それなら、一学年始まってすぐにあった自己紹介みたいのにでないからな。」

「やうなると、Hマークがやせしょしてたのは一年のころか？」

「あー…せうだと俺も知つてると思ひたけど…」

一人が話してゐる間に、林の外に到着した。

「おい、中井！ いつたいどうしたんだ？」

「それが… 赤沼 トングスケが林から走ってきてきたの。

一人は驚きをかくせなかつた。

「や、それで、今どこに？」

「むじうでトモさんの部下たちがおわざてるわ。」

「早くそこにつれてこつてくれー！」

「もん。」

ブタは盛大に暴れまわっていた。

「…おい、お前、殺してないってことはそれ以外になにかしたのか？」

シンジがそう聞くと、ブタは更にふるえだした。

「ち・ちがうもん！メールがきただけだもん！」

「メール？」

「そ、そつだよー。お前らがおくれたんだひーー。」

シンジはかなりイラついてきた。

「どんなメールがきたんだよ!」

「う、裏Deleteってサイトに、  
つて書き込めて！」

シングルの「いつかはパーク」にたつした。

「それで本当に書き込んだのかよ！誰からきたのかもわからなかつたのに！」

ブタは振幅がひろくなり、目の残像が見えるほどになつている。

「だ、だつて！『書かなかつたらお前が桜川のこと好きだつて言いふらす』つて…」

プチン。

シンジの中で、なにかがきた。

「この・・・ブタヤロ――!――!」

このブタはゼンマイ飛べるブタなよつだ。およそ5メートルは飛んだだろ。

いや、ボクシング部のシンジが飛ばせる人間で、こいつはただのブタなのか。

「シンジ！ストップ！！」

トモヤがシンジをとめた。

「どうあれ、じつに詳しいことを聞くわ。

シンジは5メートル先で首を縦に振りまくるブタがうぞくでしょうがなかつたが・・

とつねにアーチーの元へ戻る事になった。

## 第八話 情報（後書き）

ツトム「ほ・・本当になかつた・・」

ブタでも出番あつたのにね。

ツトム「か・・感想おねがいします・・」

や・・やすが・・

## 第九話 録音（前書き）

ジトム「今日は出番あるんすかねえ・・・」

がつづりあるよー。

ジトム「おおー早く読みだべだせーー。」

うわあ・・

## 第九話 録音

シンジ、トモさん、中井はブタをつれてアパートにもどった。

「お疲れ様っす。・・え? ブ・・赤沼! ?」

シンジはツームの一言でどれだけがんばってくれてるかがわかつた。

「へえ~・・かなり調べてるじゃないですか。」

ツームはほめられたのがうれしくて、頬をポリポリ書いている。  
そしてトモさんが口を挟んだ。

「全くすごかねえだろ。ってかなんでツームには敬語なんだ?」

シンジはなやむ間もなく答えた。

「トモさんはなんか同年代なかんじがするつていうか・・ガキっぽい。」

「・・なんだと?」

トモさんがシンジにガンを飛ばすが、中井が割って入った。

「ふざけてないで、とりあえずツームさんに説明しましょう。」

三人はツームに手に入れた情報の一部始終を話した。

「なるほど。だから赤沼がここにいるのか。」

ふつ、と全員が一息ついて、トモさんが話しだした。

「おい赤沼。お前はそのメールを送ってきた相手を知らないんだよな？心あたりは？」

「あ、あああつたら、も、もつてゐるもん。

始めはシンジと中井だとおもってたぐりこだもん！」

「ああ、私たちが学校で言つてたこと聞いてたからね？」

シンジも「ああ、やつこつ」とか。「どうなすいてい。

トモさんはため息をついてブタに言つた。

「心あたりがないんじゃ あこれ以上こじにいても無駄か。

まあ書いた奴がわかつただけで十分だ。もつ帰れ。」

ブタはなにか言いたげな顔をしてくる。

シンジはそれに気づいた。

「どうした？」

「きょ、共犯とかでつかまると思つてたんだもん。」

シンジとトモさんは見合つてちょっとふきだす。

「そりゃあ共犯になりかねないけど、これが知ってるのオレらだけだし。」

「「！」はあの一発だけでやるじゃんよ。」

そう言つと「タは気持ち悪い笑顔で帰つていった。

中井は、ブタを許した二人を見て、安心していた。

「じゃあ、情報をまとめるわよ。」

よし、と四人が円になつたときに、パソコンの画面が明るくなつた。

画面に「WORDHNG」の文字が現れた。あのサイトの・・更新の合図だ。

五分後。

ある男が北面の殺された空き地にいた。どうやら誰かをまつていろらしく。

ある男とは・・市間 タク//のことだった。

「君がDeleter<sup>デリーター</sup>だったのか。今日のことではっきりしたよ。」

「・・・・・」

現れたもう一人の『男』はそれを否定している。

そして、あの妙なものをとりだした。

「それが今まで使つてきた殺人道具だね？いや・・兵器とでもよぼうか。」

• • • ! • • • • !

兵器をもつた男はかなりあわてながらその兵器をかまえた。

「まことに」

タクミは兵器をもつた男にそう言いながら、録音機を取り出した。

君の声は取っている。もう殺しても無駄だけね。

兵器を持つた男は体を震わせながらタケミヒツコこんだ。

タケミはそれを冷静にかねす。

「理由はDeleteる。」の言葉 자체だよ。」

兵器をもつた男はもう一度つっこむ。タクミはそれをかわすが、もう角に追い詰められていた。

「僕がここで死ぬってサイトに書き込んで置いたんだ。君はもう終わりだよー。」

そう言ってタクミは空き地の外の草の茂みに投げ捨てた。

（北富・・君と付き合っていた時間は幸せだったよ。同じ場所で・・死ねるんだ。

タクミは突っ込んでくる男を前に、笑みを浮かべた。

「後は・・・頼むよ。・・・シンジ。」

鈍い音がした後、タクミは崩れ落ちた。

男は息を荒くし、逃げるよつに去つていった。。

僕、市間タクミは空き地で死ぬ。なお、録音機を投げておくから、あとは頼む。

その書き込みを見たあと、シンジとトモさんは空き地に向かつた。

ついた時には、タクミが倒れていた。

「タクミー・タクミー――――――」

シンジがタクミにかけより、死体を抱きおこした。

「おい、シンジ！野次馬がくる前に録音機を見つけないと…」

トモさんがシンジに呼びかけると、シンジは立ちあがつた。

「タクミ、絶対に捕まえてみせるからー。」

トモさんが草の茂みで録音機を見つけたが、投げ捨てたせいでビビ

が入っていた。

「まだあるつて」とは口を離さず、急いでにげたみたいだな。

しかしこれじゃ、あなたせるかどうか……」

トモさんは録音機のヒビを見ていった。

しかし、シンジは携帯をだし、中井に連絡する。

「……ああ、そうか。じゃあ今からもどる。」

トモさんはシンジの行動の意味がわからず、シンジに問いかけた。

「何してるんだ？」

「エーハーハーハの天才は、20%復元できるらしい。」

トモさんはようやく納得して警察の部下に連絡した。

「オレはもどるから、あとは頼む。」

二人はアパートにもどった。

「録音機、どれ？」

シンジは録音機を中井にわたした。

「やつ道具は用意してあるの。ちょっとまつてね。」

10分後。

「かなり内容が少ないわね。復元できたのは一文だけよ。」

全員が復元されたCDのまわりにあつまる。

「じゃあ、音量上げて再生するわよ。」

ザザーッというノイズと、足音がなつている。

足音が止まると、タク//の言葉が流れた。

「理由はDelete。その言葉 자체だよ。」

「いいでCDが止まった。」

全員が間に少し沈黙の時間があつたが、シンジが気づいたように話  
しだした。

「理由がDelete?それってまさか・・・」

シンジは紙とペンを取り出した。

## 第九話 録音（後書き）

いやあ、次で決着です！

シンジ「感想よろしくお願ひします！」

さすが主人公。こういうところはしつかりとるね。

## 第十話 真相（前書き）

さあ、真相が明らかになります！

トモさん「なんか異常に長い気が・・・」

前回の倍以上ありますから（笑）

## 第十話 真相

シンジは紙にこうつ書いた。

デリーター  
D e l e t e r

「どうこうこと？」

中井、トモさん、ツトムの三人は意味が理解できず、お互ひの顔を見る。

「つまり、この言葉の中に、犯人の名前があるってことだよ。」

トモさんが意見をだす。

「連想していくとか？」

シンジは首を横にふった。

「ちがうーこの言葉自体が犯人の名前なんだって！」

中井も気がついた。

「まさか・・並び替えると・・・」

「そりーーじつこうことだーー！」

シンジは紙に続けてこうつ書いた。

三人は「あつー」と言つて口が閉じなかつた。

「レ・・レトワード・・・・・・」

トモさんはそれしかいえなかつた。

「やうだ。あいつは自分がDeleteだと示していたんだ！」

「ツームー・レトワードの情報をもつヒー。」

「は、はいー。」

カタカタカタカタ。素晴らしい速さでツームが情報を引き出す。

「それにしても・・よく気づいたわね。」

中井が関心の目を向ける。

シンジは「まあな。」と少し照れながら返した。

「どうだ、ツーム？」

「動機になる理由が見当たらぬすね・・揉め事とかもないし・・

」

「あつー。」

その声を出したのは中井だ。

「ミナミが高橋と付き合つたって話をシンジがしてたとき、レトリー  
ードも反応してたわ！」

シンジも思い出して大きく頷く。

「それだ！」

トモさんは中央に全員を集めた。

「レトリーードは兵器を手に入れた後、桜川と付き合つていたエトーー、  
仲の良かつた北富を殺した。しかしその後、高橋が桜川と付き合  
つてしまい、

「高橋をターゲットにしたんだ。そして市間にばれてすぐ、市間を  
殺した！」

トモさんの話の途中でツトムが「あれっ？」と首をかしげた。

「高橋が殺された時、市間はレトリーードをかばつたんですね？」

「なんで犯人とわかつてて……？」

その答えには、シンジが答えた。

「あいつは確実に録音したかったんですよ。妙に疑つたら逃げられ  
る可能性がありますから。」

中井もそれに続く。

「あとは・・あこつは最後まで一人で戦いたかったのよ。プライドが高いから。」

「まあ、やつこいつだ。シトム、市間はモーゆー奴なんだよ。」

シトムは苦笑を浮かべた。

「話をもじすが。問題は「これからレコードがどうするか」だ。

オレの予想では・・あこつは桜川を狙つと囁く。

トモさんの意見に全員が同意した。

「桜川を苦しめるのが目的ならやつだ。

「リナリを極端でなかつたりもとHマーを殺したりしないだろう」

それで間違いないんじゃない?」

「やつすね。事件を長引かせたくないだから、早ければ明日にでも。」

「やつなると、レコードは桜川に振られたことがあるのかもな。」

トモさんがさりげなく意見をだした。これにも全員が同意する。

「よし、明日の放課後こ、レコードをつかまえるが。」

『氣づけば、もうすっかり夜になつてゐる。

』の日は市間の録音で、シンジや中井が狙われないよつ、全員アパートで寝る』こととした。

次の日。

怪しまれないよつ、シンジはトモさんを見守られながら先に登校し、

その後に中井がツトムに見守られながら登校する段取りとなつた。

そして、シンジとトモさんがアパートの扉を開け・・

「うわー！」

そこには見知らぬ人物がいて、シンジとトモさんは慌てて距離を取つた。

「だ・・誰だお前はー？」

するとその男はフツと笑つて話しだした。

「一応お前と同じクラスなんだけビ。」

「えつ？お前みたいな奴、しらねえよー。」

「俺は渡木 イズミ。まあいわゆる幽靈生徒つてヤツ? うん。それ。

それ。」

幽霊生徒。つまり在籍してはいるけど全く姿を現さない生徒のことをいだ。

「まあか、一年になつてから一回も学校来てないのか？」

シンジがそう聞くと、イズミは当然のよつに首を縦に振った。

「な・・・なんで? D e l e t e r が怖いのか?」

するとイズミは首を横に振る。

「失恋した、とか?」

また首を横に振る。

「あつ、イジメか!」

「そんな楽なことじやねえよー。」

イジメ、失恋は楽な」とりし日。

「じゃあなんだよ?」

「……朝起きたら、ハンパない腹痛がおそつてくるんだよオー。」

・・・・・・・・・

シンジ、トモさん、イズミの間に沈黙が漂つ。

「ふ・・腹痛で休んでんの・・?」

「腹痛の辛さがわかつてねえ！腹痛より辛いことなんて、それこそ命にかかるぞー！」

「おい、」

シンジとイズミが話してるとこで、トモさんが割つて入った。

「腹痛の話はどーでもいい。なんで幽霊生徒がここにいるんだよ！？」

するとイズミは先ほどまでは全くちがう真剣な眼差しをして言った。

「お前ら、Deleter事件調べてんだろ？ そんで犯人はレトリーだというところにいきついた。」

「なんで・・・知ってるんだ・・・？」

シンジがそう聞くと、イズミはスピーカーのような物を取り出した。

「情報収集が得意なのと、盗聴が趣味なのと・・・とあるサイトの管理人だからかな？」

シンジとトモさんに驚愕が走る。

「お前が裏Deleterの管理人！？」

「ああ。犯人を見つけるのに学校に行く必要なんてない。」

「こつは最強か？シンジとトモさんは全く同じことを考えていた。

「さて本題だ。よく考える。トレコードは全ての犯行をこなせるのか？」

「え・・？」

シンジとトモさんは全くその答えがわからない。

「高橋のと、シンジ。お前がこの刑事さんに話していただい？」

「高橋が殺されたと、・・？」

あいつのと、俺が知らなくても無理ないんだ。

なんかあいつ、朝きてすぐに保健室に行つたらしい。

「そりか！トレコードはエトーレが殺されたとき、あの場所にいなかつたんだ！」

イズミは少し笑みを浮かべた。

「まあ、そこまでわかれば大丈夫だな。」

「つー・・お前はなんで犯人を捕まえにいかないんだ？」

「めんどくさいから」 そういってイズミはアパートを去つていった。

「シンジ、トレードが犯人じゃないなら、D e t e c t o r の意味はなんなんだ？」

トモさんはシンジをみると、シンジは考えこんでいた。

「タクミも俺たちと同じ間違いをしていたんだ。でもレトリードがからんでいるのは間違いない。

こらはすだ。レトリードをあやつっていた本当の悪魔が…」

三十分後。

「もうこいつとか…」

「ああ、間違いねえよ、シンジー！」

こうして四人は新たな作戦を立てた。

そのころ、学校。

ケント、ダイ、コウイチの三人はシンジを心配していた。

「休んで連絡もないなんて…あいつ、大丈夫だろうな…」

すると三人にある女が声をかけた。

「シンジくんはDelete事件の犯人がわかつたって言つてたわよ。

つかまえる作戦でもたてるんじゃないの？」

そう言つたのは中井だ。

「……声でけえよー！」

中井が周りを見渡すと、クラスの生徒全員が中井に注目していた。

「あ、すいませーん。」

（視線・・かなり強い視線が混じつてるわね。まあ、作戦成功かな  
？）

「気にしないでくださいねえ。」

中井は笑顔でそう言つて、席に座つた。

放課後。

レトリーードは校門をでて右に曲がり、ちょっとせまく、

人がほとんど通らないような道に入つていった。

「まてよ。」

レトリーードの前の曲がり角から男が一人と女が一人でてきた。

シンジと中井。

「な・・なんデスカ？」

「よつ、D e l e t e r。」

「ビリコリのみテスカ！？」

「お前は自分を振った桜川が許せなかつたんだり？」

「お前は自分を振つた高橋と北原を殺したんだ！」

「だからトーレーと北原と高橋を殺したんだ！」

レトローデは慌てて首を横に振る。

「ち、ちがこマスヨー。」

「そしてレトローデがD e l e t e rである」とビリコリしてしまつたタクミも殺した！

レトローデは汗だくで声も出なくなつてゐる。

「お前の名前を並び替えると、D e l e t e rになる」とビリコリしたタクミをなーあー。

「ちがこマス・ちがこマスヨー。」

「ビリコリ推理をさして、レトローデを捕まへやつとしたんだ

「え？」

「ひ。

レトリーードはシンジの田線が自分の後ろにきてくる」といふ声づき、後ろを振り向く。

「出できなよ。本当のD e l e t e r。」

シンジが呼びかけるが、なにも起きない。

「その曲がり角にいるんだろ！？ 桜川ア――――」

すると曲がり角から本当に桜川が現れた。

「やつぱりな。」

「な・・なにか勘違いしてない？ 私は犯人が誰なのか気になつてここに・・・」

「お前の作戦はこうだ。」

桜川の話を無視してシンジが話し始めた。

「まず兵器を裏ルートかなにかで手に入れたお前は、人ごみにまぎれてエートーを殺した。」

そしてその後レトリーードに、「言つひとをきいてくれたら付き合つてあげる」みたいな事を言い、

一年生一人と北富を殺させた。そして高橋のときは同じく自分に告つて来たことのある

ブタをつかつて人だかりを作つた。しかしここで一つお前はミス

をおかしてしまった。

本当は自分と高橋ヒツコトヘルのサントリーだけなのにブタもついてきてしまい、

俺たちにブタが捕まってしまったんだ。」

シンジの話に、桜川が反論した。

「私が命令した証拠なんてないじゃない！Hトーくん達を殺す動機も！」

「あるんすよ。」

「け・・・刑事さん・・・」

桜川が後ろを振り向くと、そこにはトモさんとジムがいた。

「今あなたの母に頼んで部屋を調べさせてもらつたといふ、大量のお金と

Hトーくん、北宮、高橋の通帳がみつかりました。動機もこのお金ですね？」

ジムが話し終わると、トモさんが一步前に出て言った。

「金なんかの為に何人も殺しやがって・・お前は命の重みを知れ！..」

(へ・・へや・・)

「「Jの世は金が全てよー・レトワード、暴れちゃつてー。」

桜川がレトワードの方を向き、叫んだときにはシンジがレトワードを捕まえていた。

「あ・・」

「みどめたな？自分が犯人だと。」

「え？・・あつー。」

トモさんが桜川をとらえた。

こうして、二人は捕まり、次の日からテレビでは「Jの話でもちきりになつた。

「えー、「Jの月光高校でDelete」となる連續殺人犯が捕まりました。」

シンジ達四人はアパートでそのテレビをみていた。

「いやー、トモさん、ツトムとも、これでおわかれか。」

「まあ、どうかで会つや。」

「そうですよ。」

ブルルルル。

シンジの携帯がなつた。

「もしもし。・・ああ、ケント。え? 裏Deleter? わかった。

「

「どうした? シンジ。」

「裏Deleterを見ろって。」

ツトムがパソコンを開いた瞬間に全員の目に信じられない文が飛び込んできた。

「そんな・・」

「どうやらおわかれはまだまだ先だな。トモさん。」

「そう、じこ。」

Deleter様に逆らう外道モードー我が裁きをへだしてやるー。  
私は! 代用Deleterだ!

## 第十話 真相（後書き）

と、ついで次からせ第一回です！

シンジ「せひて一捕まえてみせるー。」

あ・・あの、この魔氣込みを伝える場所じゃないんで。

シトム「玉輻にっぽこあつて幸せだーー。」

お前は毎回やれだな。

中井「感想、評価お願ひします。」

シンジ、シトムと、どうれたーー。」

## 第十一話 二代目（前書き）

シンジ「なんか更新が遅いわりには短いような・・・

だって、パソコン動かなかつたんだもん！

中井「せっかく第一部に入る大事なとこだつたのに・・あ～あ・・・

だから僕のせいじゃありませんって！

## 第十一話　一代目

Deleter様に逆らう外道もー我が裁きをくだしてやるー。  
私は「代田Deleterだ！」

シンジ、トモさん、中井、ツトムの四人の目にそんな一文が飛び込んできた。

「俺たちへの宣戦布告・・か？」

最初に口を開いたのはシンジだった。

「こいつ、Deleterとトレーニングの関係にはおちりへえついていないな。」

そのシンジの言葉に、全員がうなずく。

そして全員はもう一度パソコンに向きなあつた。

「裁き・・」

中井は考えこみながらつぶやいた。そして、とある考えが浮かんだ。

「まさかこいつ、Deleterが無差別に人を殺してたと思つてるんじゃない？」

それを様つてよんでもうことは、裁きつてのは、自分が変わりに殺すつてことなんじや・・」

「そんな・・」

話をきいたツトムがふるえあがつてゐる。

「シンジ、中井。明日からの学校は常に周りに氣をつける。

」いつの言い分的に、一番ねらわれやすいのはお前らだからな。」

トモさんがまとめて、四人は解散した。

次の日。

「なんだこれ・・・?」

シンジは学校について呆然とした。

学校は静かで人気もかなり少なかつたのだ。

「よひ。」

そんなシンジに声をかけたのはケントだつた。

「俺もこの静かさには驚いたけど、当然といえば当然だ。

なんせ、昨日20人殺されたんだからな。」

「2、20!?」

「ああ。頭がオカシイんだよ。そいつは。」

ケントは下を向くシンジの顔をのぞきこむよつて続けた。

「で？犯人の目星はついてんのか？」

シンジは首を横にふった。すると、

「まあ、今日学校にきてる奴らの中にいるんだうけどな。

同じクラスなら中井、原谷、ブタの他に、柿崎 キセキ、藤田  
カズシ、坂本 ノゾム、

榎本 ナツキ、倉石 ミユキ、北條 フウガ、滝 レンタの七人  
だな。」

ケントは、それぞれ指をさしながら話していく。

シンジはそのメンバーを手帳にメモしてケントとわかれた。

もちろんこの日も、学校はすぐに終わった。

放課後、四人がアパートに集まる。

全員20人殺害されたことに驚きを隠せなかつた。

「まちがいない。そいつの目的は、より多くの人間を殺すことだ。

だが20人となると、一人じゃない可能性も・・・」

「あ

トモさんが話してゐる途中に、ツトムが口を開いた。

「そりいえば、殺された20人の大半は丸い跡のほかに、

ナイフで刺された傷があつたらしいですよ。」

「・・・複数犯つてことで間違いないわね。」

ツトムの話を聞いた中井がトモさんの意見に同意した。

「でも、人殺すことに賛成するようなのがそんなにいっぱいいるのか？」

シンジの問いに中井は少し考へた後に答えた。

「まあ、多くて三、四人でしょう。」

三、四人。その人数の中に知り合い、友達がないことをシンジは全力で願つた。

## 第十一話　一袋目（後書き）

なんかこいつぱい名前でてきたけど、後々説明するんで、

存在だけ覚えといてください（笑）

全員「とこいつわけで、感想、評価、お願ひします！」

## 第十一話 教会（前書き）

第一章、いかがでしょうか？

中井「あなた・・日があいたからあせつてゐるの？」

「あへつ！」

ジトム「だ・・だいじょひぶつすよー。」

お前だけには励まされたくないーー！

## 第十一話 教会

「・・・べやひ」

シンジは落ち着かず部屋を歩き回っていた。

犯人が何人もいて、もう二三十人も殺されている。もはやいつ知り合いが殺されるかわからない。

そんな状況でなにもできない自分への怒りがこみあげていたのだ。

そこでツトムが声をかける。

「シンジくん、気持ちが落ち着かないのはわかりますが、今はどうしようもないですよ。」

「落ち着けるわけないですよッー！」

しかしシンジはそれをふりはらった。

「！」のままじや、友達が殺されるのを黙つてみてることになるんす  
よー？」

「俺はどうすれば・・・」

その時、とある人物の顔が浮かんできた。

(トウコ・・あいつなら・・・)

「どうしたの？」

「錦町、トコトコヤツに会つてへる。」

「トコトコ！？何を言つてゐるの？」

中井はシンジの発言が信じられなかつた。

それを見ていたトモさんとツームは首をかしげていた。

「そうだ……トモさん、今日学校に来てたクラスメートを書すことから、調べといってくれねえか？」

たいした情報はないだろーけど。」

シンジは申し訳なさそうな顔で頼んでいる。

「バカ言つてんじゃねえよ。どんだけ面倒でも、どんだけ意味なくても調べてやるよ。」

・・・ツームがな。」

「えー？僕ですかー？」

トモさんは半分ふざけながらしゃべりなさいた。

「頼みましたよ、一人共。」

そしてシンジは外へでようとしたが、中井が止めた。

「待つて！私も行くわ。」

中井は軽くウインクをしてみせる。

「わかったよ。」

シンジは軽く笑いながら答えた。

「おー！それで、トウコツのまじつばつなんだよ。」

トモさんの質問に、

「犯罪者。」

そう答えてシンジと中井はアパートを出た。

「この感じだと、5時には少年院に着いて、帰るのは10時をまわりそうね。」

「そうだな。」

その辺り……とある教会。

「……時間だ。」

怪しい人物と、それをとりまく十ほどの人間。

「みなさん、準備はいいですか？……そう、それぞれの復讐の準

備は！！

「ハセキル君はお前がお前でいいんだよ。」

「さあ行きましょ。今こそ・・悪魔による天誅のお時間です！」

一時間後・

少年院へと進む途中、中井が道の先に人だかりを見つけた。

「シンジ・・あの人だかりはなに?」

「嫌な予感がする……行こう！」

そこには、シンジには信じられない光景があった。

「う・・・うそだろ・・?」

そこについたのは・・・・・若井ダイの死体だつた。

「ダイ！ダイ――――――！」

二代目Deleterの魔の手が・・ついにきてしまったのである。

## 第十一話 教会（後書き）

トモさん「何？オレの出番なくなるの？」

シーム「そんなあ・・」

トモさん「だすから許してくれ（汗）

トモさん&シーム「感想コロシクッ…」

機嫌なおんの早つー

## 第十一話 錦（錦書也）

トモちゃん「なんだ、出番あつやつじゅん。」

いやあ、わがに可哀れだと想つてね。

ジトム「僕……ヤコフなことやナビ……」

・・・・・・・・・

## 第十二話 錦

「ダイ・・・・・・くそつ・・・・・」

「シンジ・・・」

シンジはダイに走りよる。

中井は一言つぶやくだけ。なにか言いたかったんだろう。  
しかし言葉がみつからなかつたのだ。

シンジ【】とつてこれほど屈辱的【】とはない。

大量殺人を簡単にできるような連中に、友達が殺されたのだから。

中井にはそれがわかつていたのだ。

シンジが人ごみをかきわけて進み、冷たくなつたダイを抱き上げる。

すると、手に信じられないものがついた。

そう、赤く染まり、生暖かいもの

「血  
！――」

「えー・へ・びうこひ」とへ。

「なぜだ・・・・? 兵器で殺されたなら丸い跡が残るだけ。

血がでるはずがない・・・あつー！」

シンジが驚くのも無理はない。背中にナイフの刺し傷があつたのだから。

「どうしてくれー警察だー！」

「え・・・アモさんー！」

「おう、随分早い再会だったな。」

「それより見てくれ、背中に刺し傷がー！」

「ーーーとにかく、ここのオレにまかせろ。犯罪者に会いに行くんだろ?！」

そう言つて、トモさんはツトムと一緒に死体の検死をはじめた。

「早く、行こー、シンジ。」

「・・・ああ。」

そり一二時間後、

「いいね。」

門番のような人にかけよる。

「錦戸　トウリと面会させてくれ。」

カツカツカツ。

「・・・久しぶりだな、トウリ。」

「フフ・・・面会なんて初めてだよ。」

「お前と会うのは一年ぶりくらいか。」

トウリは少年院にいるとは思えないほど冷静に、平然と話している。

「で？何の用だい？」

「最近月光高校では連續殺人がおきてる。」

「ふうん。」

「犯人はグループだ。しかし俺には殺人に協力する連中の気持ちがわからない。」

「なんで人を殺すような奴がいるんだ？」

少しの沈黙のあと、トウリは話しだした。

「復讐・・・かな。」

「復讐・・・」

「殺したいって思つぐらこのことがあつたとき人間はかなりゆがんでしまつんだ。

もしその状態で話術のある奴にそそのかされれば……憎しみは数倍にふくれあがる。」

「なら……殺された奴はみんなにかやつた奴つてことか？」

「あとは……信教。」

「信教？」

「……これはもう洗脳に近い。多くの命をわざわざうなづく。

そうしなければ裁きをうなづくことになるともつていいんだ。  
もしそうなら……そこつらは最終的に自分の命をわざわざうなづく。

神……いや、悪魔。」

「悪魔……裁き……」

「おそれらへ主犯はそれだらうね。」

「そんなの……じつすれば……」

「命の価値を教えてやつなんよ。あのとき、僕に会つたみたいにさあ。

「

「・・・あつだな。あつがヒツ。それなり時間だから帰るぜ。じゅ  
あな。」

そう言ひトシングは部屋を出でた。

「ハハ・・・あらあい悪介こか・・・」

部屋に残されたトカコのつばめやを知る姉妹・・・いなー。

第十二話 錦四（後書き）

トウコ「フフ・・・・」

お前ひええな（汗）

トウコ「感想よろしくね・・・？」

それじゃ書く奴いねえよ（汗&汗）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8455m/>

---

Deleter事件

2010年10月9日20時52分発行